



手紙から杉村楚人冠の交友関係を紹介する展示を開催中

手紙から杉村楚人冠の交友関係を紹介する展示を開催中

展示名称：テーマ展示「てがみ展 楚人冠の交友関係」

展示期間：3月7日（日）まで

場所：杉村楚人冠記念館

入館料：一般300円／高校・大学生200円

休館日：月曜日

杉村楚人冠記念館では、テーマ展示「てがみ展 楚人冠の交友関係」を現在開催しています。この展示では、企画展ではなかなか紹介する機会のない人物の書簡・葉書類を中心に、杉村楚人冠が交友を持っていた人びとと、楚人冠の人脈の広さを知っていただくことを主眼としています。

今回初公開の主な資料に、次のものがあります。

○ 姉崎正治絵葉書 昭和9年8月8日

姉崎は日本の宗教学の先駆者です。国際連盟学術協力委員としてジュネーブに渡り、その後巡遊したブリュッセルから出された、ブリュッセル名所小便小僧像のイラストを用いた絵葉書です。

○ 吉植庄亮書簡 昭和3年4月15日

吉植は印旛沼のほとりで沼べりの開墾を行い、農業を営みながら歌人として活動したことで知られる人物で、衆議院議員も務めています。自分の歌集への批評を求める書簡を展示しています。

○ 石井光次郎書簡 昭和20年7月18日

石井は戦前の朝日新聞社幹部で、戦後は政界に転じて活躍します。今回展示するのは昭和20年7月16日・17日の平塚空襲を大磯（神奈川県）から目撃した後の書簡で、「『勝手にしやがれ』という気持ちになるがよろしくないだらうか」と正直な感懐が書かれています。

この機会に、杉村楚人冠の交友関係に、様々な分野で名を残した人びとがいたことを知っていただければ幸いです。

【問い合わせ】

我孫子市生涯学習部文化・スポーツ課
杉村楚人冠記念館 担当 高木

☎ 04-7187-1131 (内線61-802)

杉村楚人冠記念館テーマ展示「てがみ展 楚人冠の交友関係」

令和3年1月13日（水）～3月7日（日）

展示目録

杉村縦横〔楚人冠〕宛〔姉崎〕正治絵葉書 昭和9（1934）年8月8日

あねざきまさはる
姉崎正治は宗教学者。姉崎がジュネーブでの国際連盟学芸協力委員会に出席するため渡欧した際、ブリュッセルから送った絵葉書です。ブリュッセルの名所である小便小僧の彫刻の絵葉書で、文面も楚人冠がブリュッセルに行った経験があることを「小僧さんの知己たる貴兄」と表現しています。縦横は楚人冠の古い筆名ですから、これを宛名に使うところから二人の関係の長さがわかります。

杉村廣太郎〔楚人冠〕宛市河三喜書簡 昭和4（1929）年12月11日

いちかわさん き
市河三喜は英文学者。日本シェイクスピア協会発足時の、楚人冠が賛助会員を承諾したことへの礼状です。同協会は市河を会長、つぼうちしょうよう坪内逍遙を副会長としていました。楚人冠は坪内逍遙訳のシェイクスピア全集をそろえているなど、やはりシェイクスピアの作品に関心を持つ一人でした。楚人冠の蔵書中のシェイクスピア全集は書斎の本棚に残っています。

杉村楚人冠宛夏目金之助〔漱石〕書簡 明治44（1911）年5月20日〔推定〕

杉村楚人冠と市河三喜はともに『英語青年』という雑誌の寄稿者でした。同誌は当時、地方で英語を独学する青年たちに愛読された雑誌です。明治44年に、楚人冠が夏目漱石との so much for ~ という表現の訳をめぐる議論を誌上で紹介したことがあります。この議論に結論を与えたのが市河でした。『英語青年』を中心に英語英文学に関わる人びとの輪があったことがわかります。

杉村楚人冠宛吉植庄亮書簡 昭和3（1928）年4月15日

よしうえしょうりょう
吉植庄亮は歌人。印旛沼のほとりで沼べりの開墾をし、農業を営みながら歌作をしていた人物です。一方で、衆議院議員にもなっています。展示の書簡は、吉植が刊行した歌集『くさはら』への批評を依頼するものです。吉植主宰の短歌誌『かんらん橄欖』で批評特集をする計画も書かれています。田植えの季節に合わせた来遊を誘っているあたりが、農民で歌人という吉植らしいところです。

杉村楚人冠宛川路柳虹〔誠〕絵葉書 昭和2（1927）年12月30日

かわ じりゅうこう
川路柳虹は詩人、美術評論家。渡欧中、イタリアのベネチアに立ち寄り、名物のゴンドラの絵葉書を送ってきたものです。楚人冠の長男浩は、川路に師事し詩作に取り組んでいましたが、大正11（1922）年、弱冠20歳にして病で亡くなります。川路と楚人冠とは、浩の生前の希望であった詩集の出版を、川路のしょうこうししや曙光詩社で実現させた、という関係がありました。

杉村〔楚人冠〕宛牧野良三書簡 昭和9(1934)年12月10日

まきの りょうぞう
牧野良三は政治家、衆議院議員。昭和9年に起こった帝人事件で逮捕された、二人の共通の友人であるながさきえいぞう長崎英造のために仲間の中で話がまとまれば「一つ代理として起ちたい」と伝える手紙です。事件は結局被告全員が無罪に終わっていますから、長崎のために起ちたいという牧野の見立てが正しかったことが証明されています。現在では、倒閣のための陰謀だったという説が有力です。

杉村廣太郎〔楚人冠〕宛芦田均絵葉書 昭和2(1927)年6月

あしだひとし
芦田均は外交官、のち政治家に転身し昭和23(1948)年総理大臣。赴任先のトルコからの絵葉書です。当時のトルコは、トルコ共和国の成立からわずか4年しかたっていない時期です。それを反映して、初代大統領ケマル・パシャ(ムスタファ・ケマル・アタテュルク)の肖像写真を挿した絵葉書を送ってきています。内容は、この年楚人冠が書く連載小説を期待するものです。

杉村廣太郎〔楚人冠〕宛石井光次郎書簡 昭和20(1945)年〔推定〕7月18日

いしいみつじろう
石井光次郎は新聞経営者、戦後は政治家に転身。太平洋戦争末期の手紙です。この頃、心臓病で自宅療養中であった楚人冠のために本を送る様子がわかります。一方、石井自身は大磯にいて7月16・17日の平塚大空襲を目撃し、「『勝手にしやがれ』といふ気持ちになるがよろしくないだらうか」と、偽らぬ気持ちを吐露しています。

杉村廣太郎〔楚人冠〕宛松本蒸治絵葉書 昭和10(1935)年7月22日

まつもとじょうじ
松本蒸治は法学者、政治家。戦後はしてはら きじゅうろう幣原喜重郎内閣で憲法の起草に関わる松本ですが、この葉書は昭和10年に商法改正の作業にかかっていることを伝えるものです。この改正が実現するのは昭和13年のことです。自らを「法律職人」として働いていると表現しているところが目を引きます。

杉村楚人冠宛荒垣秀雄書簡 昭和12(1937)年5月23日

あらかきひでお
荒垣秀雄は新聞記者、コラムニスト。イギリスのジョージ六世の戴冠式を取材するため、渡欧した際の手紙です。出発の際楚人冠に渡された本と、ジョージ五世の戴冠式の時に大阪朝日新聞の鳥居素川が書いた記事とを並べ、先輩たちが書いたものをを読んだことを挙げて、今回は自分が特派員になっていることを朝日のために惜しむ、と謙遜する内容です。

杉村廣太郎宛鳥居素川〔赫雄〕書簡 大正4(1915)〔推定〕年10月11日 ●

とりいそせん
鳥居素川はジャーナリスト。杉村楚人冠が大正4年に新聞記者の教科書といわれた『最近新聞紙学』を出版した際、大阪朝日新聞の編集局長で親しかった鳥居に序文を依頼しました。その序文を送った後に、文章を推敲して表現の修正を相談している手紙です。新聞人らしい表現へのこだわりが伝わります。